

「待つことのできる幸い」

ルカによる福音書 2章 22節～38節

説 教 軽 込 昇 牧 師

待降節(アドベント)第3週を迎えました。アドベントは「到来する」という意味のラテン語です。①過去、すでに到来された、すなわち主イエスがお生まれになったこと。②現在の私たちの心に主を救い主としてお迎えすること。③キリストが再び来られること、3つの意味があります。教会は、既の実現した第一の約束と再臨の約束との間の中間の時を、神がつくられたものを祝福に満ちたものとし完成して下さる希望を信じ、待つ群れとしてアドベントの時を過ごしています。

アドベントはワクワクしながらキリストを待つときです。人間となり、十字架にお架かりくださり復活されたイエス・キリストがおられる故に、私たちはこの世を生きることができます。理不尽な目にあったら、どうして神さま、こんなことが、と神に真正面にぶつかって祈ることができます。それが信仰です。信じる、それは愛すること、愛は希望につながります。明治・大正に伝道した植村正久牧師の説教に「キリストを縮小するなかれ」というのがありますが、自らの思いで神の恵みを測らないでほしい、神はこんなものと勝手に過小評価しないように、キリストの恵みはあなたが考えるよりもっと大きいのです。

今日の説教箇所には主イエスの誕生に出会った二人の人、シメオンとアンナがでてきます。シメオンは「今、わたしは主の救いを見た、もう思い残すことはない」と歌います。まだキリストは幼子です。十字架にかかり復活されたわけではありません。しかし、シメオンはその幼子をわが目で見て、わが手で抱いたことで十分でした。アンナは84歳、若い時に夫を亡くし60年以上も一人で暮らしている女性です。当然世の厳しい戦い、悲しみ苦しみを体験してきたに違いありません。「夜も昼も神に仕えていた」とあるのは、それだけ信仰の闘いが激しかったということでしょう。信仰は疑いと不信仰と背中合わせです。しかし人生の終わりになっても彼女を支えたのは、神です。

クリスマスは、人生の辛酸をなめ、歳を重ねてきた中高年の者たちの物語です。幼子主イエスに出会って、私の人生に本当の場所が見つかった、ここで私は生きることができる、安心して死ぬことができる、と受けとめるからです。三人の博士もあの星のもとに行けばという憧れをもって来ました。救い主にお目にかかれば、本当の生きる意味を獲得できるという憧れです。

初めての子を与えられて私はローラ・インガルス・ワイルダーの「大きな森の小さな家」を読みました。夜休む前のお祈りにショックを受けました。アメリカの開拓民は死と隣り合わせの生活でした。親が子どもに教えるのです。「神さま、私は今、眠ります。お守りください。もし私の命が今夜取られるなら、私の魂を神さまにお委ねします」。主イエスがおられるなら、いつでもどこでも生きることができるという強い信仰です。

以前は養護学校と言いましたが、障害を抱える児童を支える教育機関として支援学校があり、そのうちに病弱児支援学校があります。病弱児支援学校は教師が病院に派遣されます。私自身病気で長欠児童でしたから無関心でいられません。ある病弱児支援学校のクリスチャンである校長の言葉を思い出します。「この学校の教師にとって生徒の死は避けられない現実です。教え子の限られた命を知っている教師が、それでも生徒になぜ漢字を教えるのか、算数の問題を解いてもらうのか、その意味を考えない教師はいません。その教師に向き合うのが校長の仕事です。」「たとえ残りの時間がなくても、いや少ないからこそ、今日一つでも漢字を教えるのです。それが生きていることだからです。」「この仕事をやっていて、イエスさまを信じていてよかった、と思いますよ。」

これが希望です。私たちの希望の根拠は主イエス・キリストにあります。主イエスにつながってください。あなたのために主はお生まれになったのです。私たちは問題を抱えています。表面は何の問題もないように見えたとしても、人には言えない不安を抱え、何もできない現実が心がうずくのです。誰かのせいでできたら問題はないかもしれませんが、問題の根は私自身にあるということもわかるのです。そのあなたの前に主イエス・キリストが立って、私はあなたのために人間になった、お前のことは引き受けた、だからあなたは幸いだと言われるのです。

クリスマスは、神が私たちを発見して下さり、私たちが本当の私を発見する物語です。主が到来されたのです。「愛するイエスよ、今ささぐる、ひとつの願いを聞き給えや。この身と心を主のまぶねとなし、永遠に宿りたまえ。」(讚美歌21-241番6節)

(記 説教要約奉仕者)